

気象的要因に着目した越境汚染・地域汚染複合型 PM2.5 高濃度事例の解析(2)

—2019 年 5 月—

環境科学課 佐野七穂・松本弘子

名古屋市環境科学調査センター 池盛文数

埼玉県環境科学国際センター 長谷川就一

日本自動車研究所 早崎将光

国立環境研究所 清水厚・菅田誠治

第 62 回大気環境学会年会

PM2.5 の高濃度汚染をもたらす気象条件を明らかにするため、2019 年 5 月 24 日～28 日に全国規模で生じた高濃度事例について環境省の PM2.5 成分自動測定機 (ACSA-14, PX-375)、そらまめ君、気象庁の観測、国立環境研究所のライダー観測、九州大学・国立環境研究所の化学天気予報システム CFORS の各データを用いて解析を行った。2019 年 5 月 24 日～28 日に全国規模で生じた高濃度事例は、大陸からの硫酸塩エアロゾルの流れ込みによる越境汚染の影響と、気圧配置や気温等の気象的要因により汚染物質が生成・滞留したことによる地域汚染の影響を受けていた。越境汚染・地域汚染複合型の事例について、各データを用いることで期間やエリアを細分化して高濃度事例の解析を行うことができた。